

課 題 春夏作カーボロネロの栽培

担 当 者 小林 照世 大久保 繁徳

目 的 カーボロネロが春夏作でも栽培可能か調査する。

供 試 品 種 カーボロネロ (マスダ種苗)

区制及び株数 1区 100株

耕 種 概 要

| | | |
|-------|-----------------------------|---------|
| 栽培条件 | 施設 | |
| 播 種 | 3月10日 (128穴セルトレイ) | |
| 定 植 | 4月1日 | |
| 栽植密度 | 畝幅130cm×株間35cm 2条植え | 440株/a |
| 施 肥 量 | 元 肥 堆肥 | 200kg/a |
| | セルカ | 10kg/a |
| | 苦土・有機入り複合 A801T号 (有機特 A801) | 15kg/a |
| 成 分 量 | N1.2-P1.2-K1.2 kg/a | |

結果及び考察

1. 収穫は、本葉約13枚目よりカーボロネロ特有の凹凸が見られたので、5月6日から葉かき収穫を開始し、虫の食害ため収量の減ってきた7月12日に終了した。その収穫量を表1に示した。葉長は20cmで調整した。
100株当たりの収量は26.4kgで、1株当たりになると264gであった。
2. 病害虫の発生状況は、コナガとアブラムシが発生し、食害があったためプレバソフフロアブルとアルバリン顆粒水溶剤を2回ずつ散布したが、止められなかった。秋冬作に見られた生理障害のカルシウム欠乏の発生はなかった。
3. 平成27年の秋冬作と比べると、栽培期間が短いため1アール当たりの収量は少なかったが、月平均の収量は多かった。

以上の結果より、カーボロネロの春夏作ハウス栽培においては、気温が高いので生長が早く、月平均の収量は秋冬作より多いが、収穫中に散布できる登録農薬が少ないため害虫の発生を止めることができず、栽培期間内での収量が少なくなり栽培の普及は難しいことが分かった。

表1 収穫量調査

| 月 | 収量 (kg) | 1株当たり収量 (g/株) | 収量換算 (kg/a) | H27年10~2月 収量換算 (kg/a) |
|-----|---------|---------------|-------------|-----------------------|
| 5 | 11.7 | 117 | 51.5 | - |
| 6 | 13.1 | 131 | 57.6 | - |
| 7 | 1.6 | 16 | 7.1 | - |
| 合計 | 26.4 | 264 | 116.2 | 146.4 |
| 月平均 | 11.7 | 117 | 51.3 | 32.8 |